
怪獣対忍術2

亀7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪獣対忍術2

【Nコード】

N5021Y

【作者名】

亀7

【あらすじ】

「怪獣対忍術」の世界に戻って来ました。

今回は、NARUTO好きの人には抵抗が有ると思います。

まあ、設定の能力の部分以外は意味が無いです。

設定。(前書き)

戻って来ました。

設定。

今度の怪は、NARUTOの世界に戻って来る。

設定

名前 怪

年齢 20才

容姿 普通

服装 NARUTOの暁のコート

能力 ウルトラマンに出てきた怪獣の能力と姿。

武器 ギガバトルナイザー（怪獣の数は、不明。）

NARUTO 怪獣バスターズ、魔法少女リリカルなのはs t s、
トリコの順番で移動している。

ここからの設定は、あまり意味が無い。

体の中には、時空管理局から盗んだ魔力以外の動力のロストロギア
を全て取り込んでいる為、歩く爆弾。

トリコの世界で、ニトロを取り込んだ。

という事です。

共通して、敵役で居る場合が多い。

設定。(後書き)

短いですが、よろしくお願いいたします!!

まずは、味噌ラーメン。(前書き)

まあ、知っている人は知っている。

まずは、味噌ラーメン。

異次元。

「体をここに置いてっと。」
「さて、行くか。」

木の葉の里の、

近くの森。

ボコッ

土が、盛り上がり、

ズズッ

人の形に、なった。

「ふう、またこの体で動くのか……。」「
さて、

恐らく、今は、

「俺が、移動した後の世界。」

まあ、リーダーが自来也とバトルしているくらいか？

「・・・みたいだな。」

戦闘中か。

「おっ、リーダーが蟹を口寄せして小南に着いた油を、洗った。」
さて、

「今、ナルト、トウマ達はサスケを追って行って、イタチ対サスケの戦いぐらいかな？」

「・・・イタチ対サスケは、やっているんだな。」
おや？

ナルト達は、まだトビと戦って無いのか。
ん？

何で、それが分かるか？
能力で、耳が良いんだよ。

ん？

トウマって、誰？

ナルトの兄の転生者で、イケメンだ。
FATEの宝具を、使えた筈だ。

詳しくは、「怪獣対忍術」を読んでくれ。

で、今。

「味噌ラーメン麺を、大盛りで1つ。」

「はいよ!！」

「一楽で、ラーメン食ってます。」

えっ?

「暁が食っていて、おかしい？」

「いや、前から食っているよ。」

「つてか、常連。」

「でも、」

「さっきから、殺気が有るんだよなあ。」

「まあ、」

「暗部だろっけどさ。」

「「あいよ、味噌ラーメンの麺が大盛りをお待ち。」」

「まあ、」

「「食おうっと。」」

「お金は、一応まだ有るな。」

「久しぶりの味噌ラーメンっつと。」

まずは、味噌ラーメン。(後書き)

まあ、いつも食べてます。

久しぶりに。(前書き)

まあ、

久しぶりに。

ズズズズ

ラーメンを、食ってます。

にしても、

「やっぱり、美味しい。」

リアルでは、約3ヶ月近くも他の世界に居たんだよなあ。

この世界だと・・・。

・・・あれ？

そんなに、経って無いな。

前から、数日ぐらいしか時間はこの世界では経って無いから。

「まあ、」

良いけど。

時間移動は、能力で出来るし。

ズツ

「ふう、お金はここに置いておくよ。」

「あいよー!!」

一楽のおっちゃんは、いつも通りの優しい人です。

で、

木の葉の里の林で、

「で、いつまで着いて来るんだ？」

暗部の方？

ボツ

「ふん！！」

3つぐらい炎の塊を、木々の方に放った。

ビュン

「ちっ！！」

そして、

約20人ぐらいの、お面を被った木の葉の暗部が出て来た。

「まあ、」

ドゴツ

ガゴツ

「がはっ！？」

「良いけどな。」

そして、怪は出て来た全員の暗部の腹を殴った。

「はっ、」

「速い……。」

「前より、速くなっている……。」

暗部が、口々にそう言った。

……ん？

前より……？

おいおい、

「前に会った、暗部かよ。」

まあ、速くなったのは他の世界に行っていたからだと、思っけど。

まあ、

「林の方の火は、消しておくか。」
林は、怪が放った火により燃えていた。
トリコの世界もだが、また火消しかよ。
シュー
怪は、手から出した水流で火を消した。
「じゃあな。」
テレポーターション

暁のいくつか有る、
アジトの1つ。
「はあ、久しぶりにテレポーターションにアジトだ。」
さて、
「リーダーは、バトル中か。」
小南も、一緒か。
はあ。
「暇だ。」
後は、

「トビは、ナルト達の足止め。」

ゼツは、サスケ対イタチの戦闘データの記録をしている。

鬼鮫は、水月とかとお遊び？中。

・・・どこに、行こうか？

「トビは、面倒。」

ゼツに至っては、戦闘に巻き込まれるだろうし。

鬼鮫は・・・まあ、問題が無いだろうけど戦いを、楽しんでいるし。

「うーん。」

俺は、

「・・・やる事が、無い。」

いや、

「暁の財布担当だけどさ。」

でも、

「ビンゴブックの、」

首が高い奴は、前に狩り終わったしなあ。

『怪か？』

「うおっ、リーダー!!!」

幻灯身の術で、浮かべたリーダーの幻身が目の前に居た。

『どうしたんだ？』

「いつ、いや、何でも無い。」

久しぶりで、びっくりしたな。

『なら、』

「ああ、賞金首を狩って来るよ。じゃあ。」

テレポーション

で、

「まあ、久しぶりに仕事をするか。」

久しぶりに。(後書き)

あんまり、なあ。

書隠れで。(前書き)

まあ。

雲隠れで。

で、湯隠れの里の近くの換金所。

「確かに、1300万両だ。」

ビンゴブックを、見ていた男が言った。

「だろうな。」

久しぶりに、換金所に賞金首を狩って来た。

「ちよつと、待っててくれ。」

で、

ズシッ

「1300万両だ。」

換金所の男が、1300万両が入ったケースを置いた。

「ああ。」

ガチャ

「じゃあな。」

ケースを、持った。

「ああ、今度も頼む。」

「さあな。」
テレポーテーション

で、近くのマジト、
ドンッ

「ふう、ケースはここに置いてっど。」
さて、

「どうしようか？」
暇だ。

「今は？」
。。。。

おや？
イタチ対サスケは、終わったか。
原作通りに。

・・・ナルトの方も、同じか。
「・・・そういや、」

トウマは、いつまで原作を知っているんだ？

「……。」

俺の実体を消すのを、トビと同じとおもっているのかな？

「いや、」

この能力？は、絶対に分かる筈が無い。

ウルトラマンを観るとしても、ここまで理不尽な能力だとは、知らんだろう。

「まあ、」

写輪眼、輪廻眼ぐらいしか俺には効きそうに無いけど。

幻術？

まあ、月読ぐらい？

後は、チャクラを抜いたら良いし。

まあ、この体は土人形だけど。

まあ、能力が何でも有りだからどれも効くかは、分からんけど。

「うん。」

暇だ。

……リベンジを、するか。

テレポーテーション

で、

雲隠れの里の近く。

空を、飛んで居ます。

「さて、」

。。。

八尾のラップが、聞こえ無いな。

「いや、里から離れて、」

居るが、

「サスケ達が、戦う前か。。。」

まあ、タコの足だろうけど。

「ちよっと遊ぶか。」

そして、怪は雲隠れの里に降りた。

で、

ドンッ

『！？』

周りは、雲隠れの忍。

「おつ、おい!？」

「暁だぞ!！」

ガヤガヤ

まあ、

他の奴に、連絡するのに動く奴が多いな。
で、

「困むよな。」

でも、

クナイを、持っている奴、

刀を、持っている奴、

などが、多いな。

「でも、」

攻撃は、しないな？

まあ、こつちも攻撃していないし。

雷影でも、待っているのか？

「臨戦態勢だなあ。」

でも、

ボコッ

『なっ!？』

怪の周りの土が、

盛り上がって、

ブクッ

人の形になった。

その姿は、

『雷影様!!!』

雷影に、なった。

その数、約20人ぐらい。

「あいつ、雷影様を!！」

「あの野郎!！」

さて、

「行って来い、」
ビュッ

土人形の雷影が、動き出した。
ドガッ

「がはっ!!」

土人形が、暴れ始めた。

「なっ!?!」

「速い!!」

「雷影様と、同じ術だ!!」

「何でだ!?!」

いや、

ただ単に、

放電する土人形なんだが・・・。

まあ、速さも頑丈さも強いけど。

「おい!!あいつを、倒せばこの術も消える筈だ!!」
誰かが、言った。

まあ、

「良いけど。」

そして、怪も戦いに参加した。

雲隠れで。(後書き)

まあ、土人形です。

暴れて無いかな？（前書き）

描写が・・・。

暴れて無いかな？

戦ってます。

ドゴツ

「があっ!?!」

土人形の雷影が、暴れています。

怪は、

スカッ

「当たらねえよ。」

ドッ

「ごはっ!?!」

怪に攻撃した忍は攻撃したが、攻撃は避けられて、怪に蹴られた。

「くそっ!?!」

「あいつ、速い!?!」

口々に、忍達がそう言った。

「そりゃ、」

ギガバトルナイザーの怪獣を探す時に、動き回ったからな。

怪は、NARUTOの世界では最初の頃は死にかけたり、死んだりした。それを繰り返した結果、能力の手加減を覚えた。実際、雑に能力を使用すると、かなり被害が出る。

例、都市を消せる。

ちなみに、死んだりしたって事だが実際は、死にはしない。能力で生き返る事が出来るからだ。

「まあ、」

描写には、無いけど。

山賊とかに、刀で刺されても死な無かったからなあ。

流石に、死ぬ程痛いけど。

シユッ

「おっと!!」

怪は、飛ばされて来た手裏剣を避けた。だが、

「うおらっ!!」

忍が、クナイで刺そうとしてきた。

ザシヤ

「なっ!?!」

怪の上半身は、元の土に崩れて戻った。

ドッ

「ガッ!?!」

残った下半身が、忍を蹴った。

「何だ、あの術は!?!」

「土遁か!!」

「雷遁を使う奴は、前に出る!!」
いや、

忍術じゃねえよ!!

・・・まあ、感電しそうだけど。

ズッ

怪は、上半身を元に戻した。

そっぴゃ、

「土人形は?」

ドガッ

「ゴッ!?!」

結構、暴れてました。

うわゝお、人が飛んでいる。

後、めり込んでいるし。

まあ、生きているだろう。

俺、賞金首以外は自分自身で殺した事が無いし。

ヴェロツサは、暗殺依頼をしたけど。

まあ、大体は手加減をしている。

「・・・にしても、」

原作キャラが、居ないな。

いや、

「今、居ないのか？」

任務で？

まあ、

「放電。」

バチッ

『ぐあああああああああああああああ！？』

周りに、電撃を飛ばした。

まあ、

「NARUTOの世界だし、」

そう簡単に、死なんだろう。

ドガアッ

「うん？」

土人形達の方か？

土人形達の方には、土煙が上がっていた。

そこには、

「雷影様の偽者がっ！！」

何だ？

あの色黒の怒りっぽい様な女は？

「全くですね。」

こっちは、静かそうな女は？

「でも、これがもし、」

何か、暗い男は？

原作キャラの・・・。

ありゃ、

名前を、忘れた。

「土人形は？」

「はんつ、この偽者の事か？」
ゲシゲシ

おい、

蹴るな！！

「・・・まあ、」

良い。

これで、踏ん切りがついた。

「・・・戻るか。」

「！？逃げるぞ！？」

「逃がすかつ！！」

シュッ

怪は、土になって崩れた。

そして、

「逃げたか・・・。」

で、

有るアジト、

ボコッ

地面が、盛り上がって、

ズズッ

人の形に、なつた。

「まあ、」

魂だけ、移動したって事。

テレポーテーションで。

でも、

「あの土人形が、」

壊されるか。

まあ、再生できるんだが、

「しょうがないか。」

もう、気が済んだし。

さてと、

「次は、どうなるかな？」

暴れて無いかな？（後書き）

どうなるかな？

相方？（前書き）

まあ、だとさ。

相方？

で、アジト、

「どうしようか？」

「何をするんだ？」

「うん？」

声が出た方を、見たら、

「トビ？」

トビが、居た。

で、トビ（マダラ）に、

いろいろな、説明を受けた。

そして、

別のアジトで、

「暁、鷹が、揃ってます。」

「誰に、言っているんですか？」

鬼鮫に、聞かれた。

「いつもの独り言だ。」

「そうですか……。」

呆れるなよ。

つてか、

そこの鷹のメンバー、

こっちに、変な視線を向けないでくれ。

恥ずかしくなるから……。

で、

いろいろ話し合いが有り、

現在、

「ゼツと一緒に行動に、なりました。」

「だから、」

「誰二、言ッテイルンダ？」

「気にするな。」

「「いや、気にするからね(ナ)!!」「」
ゼツに、ツッコまれた。

「ってか、

「なぜ、俺はゼツと一緒にの行動になったんだ？しかも、ゼツと同じやり方で移動？」

「ソリヤア、」

「怪も、できるでしょ。同じ事が。」

「いや、まあ同化は出来るけどさ。」

「元々が、土の体だし。」

「ってか、

「俺は、ゼツに見張られてるのか？」

「うん(アア)。」

「今になって、自由行動が出来なくなった。」

「まあ、今までが自由過ぎたか。」

「そういえば、今更だがゼツが地上で行動出来ないのはあの草？みたいな部分が、目だつからだかさ。」

で、

「もう、八尾の封印？」

「そうだ。」

いや、偽者だろうけど。

そして、封印し始めた。

集中、集中っと。

相方？（後書き）

ゼツに、見張られる事になった。
自由行動が、多いから。

傍観。
(前書き)

短い。

傍観。

で、

ボンッ

ありゃ、

「……足？」

八尾が、タコの足になった。

「サスケくん……。どうやら、へました様ですねエ……。」「
鬼鮫が、言った。

「……。」

トビは、仮面で表情が読めない。

「あははは！！タコ足だア！！」

「笑ウナー！！」

で、

「封印は、どうするんだ？」

トビに、聞いた。

「……八尾が、居ないなら今は意味が無いな。」

はあ、

「取り敢えず、休憩だな。」

で、

いろいろ有って、

ドガーン

木の葉の里の、近くです。

ズズッ

現在、上半身だけ地面から出した状態。

「・・・滅茶苦茶だな。」

「マア、」

「ベインだしね。」

「つてか、壊れ過ぎ。」

「はあ、

「こんな死地で、待つて居なければいけないのか？」

「うん（アア）。」

「・・・お前ら、凄いや。」

「え？」

「ゼツと一緒に行動だから、

九尾を狩り終わるまで、

待つて、居るんだよ。」

「つてか、

「このまま？」

「このまま（ダ）。」

「いや、

「暇じゃね？」

「イツモダ(よ)。」
・・・。

で、

暴れるのを、

見ている、

「輪廻眼・・・。」

今更だが、強過ぎ。

そして、

「暇だ。」

「暇だよね。」

「暇だな。」

見ているだけで、

暇だ。

「参加したら、」

「邪魔になるから、ダメ(だ)。」

という事。

まあ、

「あんなの、参加したく無い。
巻き込まれるし。」

傍観。(後書き)

こころなる。

傍観してたら。(前書き)

あれえ？

傍観してたら。

ああ、

「暇なんだが？」

「いや、」

「分カルガ……。」

はあ、

「リーダー……じゃなくて、ベインはさっきから、暴れ過ぎ。」
もう、

さっきから、ドガンドガンって音が鳴っているんだが？
ってか、

「居ないのか、うずまきナルト？」

それに、トウマ？

「いや、隠れてるんじゃないの？」

「捕マツタラ、終ワリダカラナ。」

だけど、

「九尾って、すぐ封印が出来なくね？」

他より、力が強過ぎて封印が出来ないから九尾以外を、先に捕まえるんじゃない？

「さあ？」

「トビニ、考エガ有ルンダロウ。」

「そうか……。」

まあ、無理だろうけど。

「うおっ!?!」

「うわっ、何やってんの?」

「オイ、ココカラ離レルゾ!」

ベインが、空へ浮かんでいった。

「巻き込まれる!」

ズズッ

地面の中に、潜った。

地中。

ズズッ

うおっ、揺れた。

・・・。

収まったか？

あっ、ゼツが上がっていく。
戻ろう。

で、

ズズッ

「うわゝお。」

ベインを中心に、クレーターが出来ていた。

「これ、大丈夫なの？」

「大丈夫ダロウ、多分。」

おい、黒ゼツ。

今、多分って言っただろう。
でも、

「被害が、出たなあ。」

一言、

これ、絶対に忍じゃねえ。

つてか、忍ぶ気がねえだろう？

絶対。

・・・ん？

「おい、あれって!？」

「来たね。」

「人柱力・・・ト？」

おや、

「うずまきトウマも。」

仙人かよ!？

こりゃあ、

「面倒だ。」

傍観してたら。(後書き)

まあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5021y/>

怪獣対忍術2

2011年11月23日17時49分発行